

梶田叡一著「教師・学校・実践研究—人間教育の基盤を創る—」金子書房 2005年8月25日刊を読む

1. 自己実現の力をつける学校

- (1)①一人ひとり、かけがえのない貴重な人生を与えられている。だからこそ、自分に与えられた可能性を十分に開花実現するというのが、誰にとっても生涯をかけた目標とならざるをえない。
- ②このような考えに立つ時、学校教育を受けている年少の時期に、人生の基礎・基本を形作りつつある時期に、生涯にわたっての自己実現を可能とする姿勢と力を涵養しておきたい、という願いが出てこざるをえない。
- ③しかし、これは必ずしも容易なことではない。毎日の授業で教科書を着実にこなしていく、というだけの教育活動では、到底この願いを生かすことは不可能だからである。
- (2)①毎日の授業のなかに、子どもの活動として、教師との関わりのあり方として、子どもを取り巻く環境や雰囲気として、何かがなくてはならない。
- ②このためには、当然ながら、教師自身が自己実現ということについて明確なイメージを持っていてはならないであろうし、
- ③小学校なら小学生の時期に、中学校なら中学生の時期に、子どものどのような姿が実現していけば、生涯にわたっての基盤としてそれが生きていくことになるのか、具体的な形で考えておかななくてはならないであろう。

2. 自己学習能力

- (1)例えば、自己学習能力を育むことは重要な教育課題であるが、それを身につけさえすれば、生涯にわたっての自己実現が可能になるのであろうか。
- (2)①自己学習能力と言う場合、ポイントが二つある。
- ②一つは、たとえ一人っきりであっても学んでいける力をつけてやりたい、ということである。だから、自己学習能力の育成というと、どうしても一人学びの活動が多くなる。たとえ一人になっても、自分の力だけで学んでいく、ということを経験し受け止めると、そうならざるをえないであろう。
- ③もう一つのポイントは、学習への意欲である。自ら学んでいくためには、自分から頑張っ取り組んでいこう、といった気持ちが大切であり、そうした気持ちを生み出す動機づけが大切となる。自発的自主的に一生懸命勉強しよう、というエネルギーの持ち方である。おもしろいからやってみようとか、やりがいがあるからやってみようとか、好奇心や効力感といった内発な動機づけの問題がここで大切になる。
- (3)①ところが、それだけではどうもまずい、という場合がある。
- ②たとえ一人でも、という発想は、下手をすると一人だけで孤立して学ぶ姿だけを強調することになりがちだからである。つまり、一人学びの局面もあるだろう。しかし必要なら、

教師がイニシアティブをとって授業し、生徒のほうは一生懸命それについていって学ぶということもあっていい。さらには、グループで、集団としてやっていくような場面もあっていい。あるいは、学級全体で、しかし教師はちょっと後ろに下がって、生徒たちが自分の調べたことを出し合い、違う発想違う納得を相互にぶつけ合って、一つにまとめ上げるということもあっていい。

③江戸時代の藩校とか郷校とかの教育にあったように、多様な学習形態を、一日のなかに、あるいは一週間のなかに組み合わせて、いろいろな学び方が身に付くようにもっていく。こういうことが必要ではないか、という発想が出てくるわけである。

(4)①講義式の授業にきちんと耳を傾ける、という姿勢が育たなければ自己教育力ではない。

②日本では昔から「守・破・離」ということが言われてきた。学ぶというのは、まず「まねび」だと言われてきた。学習の最初の段階では、お師匠さんのおっしゃることを素直に受け入れる。そしてそれを、己を空しくしてお師匠さんの枠組みにそった形で理解しようと努める。こういう局面が非常に重要だということが言われ続けてきたのである。歌舞伎とか他の芸道では、今もそれが強調されている。

③これが「守・破・離」の「守」である。

(5)①そしてその上で、お師匠さんの教えてくれたものに自分なりの工夫を加えて、破る。

②自分なりの工夫をして、やはり一步そこから出なくてはならない。

③お師匠さんの与えてくれた枠から一步を踏み出さなくてはいけない。「破」である。

(6)①そして最後は、自分の目指すところに向かって、自分の力で、一人だけで進んでいく。

②「離」、つまり一人旅である。

③そういうことが昔から言われてきたわけである。

3. 自己教育力

(1)いろいろな性格を持った学習活動を組み合わせてやっていくということは、自己学習能力という発想の狭さを一步踏み越えて、自己教育力の発想になっていると言ってよい。

(2)①自己教育的な面を強調する場合、単なる一人学びに焦点づけているわけにはいかない。

②いろいろな学びの様式が身につけて、そして TPO に従って、その時その場の条件に従って、それぞれの学び方の使い分けができる。ここでは自分にあえて受け身で学んでいこう。ここではあえて一人っきりで、自分なりの課題意識を頼りに自分なりのやり方で学んでいこう。あるいは、ここではあえてグループをつくって、共に学んでいこう。

③こういった判断ができるようになるということが大切になるのである。

(3)①自己教育的な場合には、学習を支えるエネルギーの問題も、単に好奇心とか効力感といったレベルでのものだけは不十分である。例えば学習の意義、何故この学習をやらねばならないのか、この学習はどういう意味で大事なのか、ということが分からなくてはいけない。

②また、それと同時に、自己評価とか自己統制ということが大切になる。自分自身を見つめ直し、自分自身に働きかけ、自分自身を支えて、自分自身を何とか一步前に押し出す、といった力が必要となるのである。

②自分自身と対話しながら、自分の弱いところ自分の良いところを見付け、自分のまずい点をいろいろとカバーし、自分の良さを生かし、そういう自分をしっかり支えて、一歩ずつ

先へ進んでいく、という力を考えなくてはいけない。しんどくても自分で自分を前進させていく、という力を、どのようにして育成していったらいいのか、ということを考えなくてはならないのである。

4. 理想的自己のイメージ

- (1)①さらにもう一步先へ進んで、自分の可能性を長い見通しのなかで開花実現していく力ということになると、自己に何を実現させるのか、ということで、まず理想的自己のイメージが問題になるであろう。人間としてのあり方・生き方を、自分なりのどう考えるかが課題となる。自分はどのような生き方がしたいのか、どのようなあり方をしたいのか、である。
- ②小学生、中学生なら、自分はどのような高校生に、大学生に、社会人になっていきたいのか、である。さらには、どのような老人として老後を過ごしていきたいのか、である。あるいは、トータルとして自分の一生をどのような形で構想したいのか、ということである。
- ③自分自身のあり方・生き方というところまでイメージをふくらませて行って、自分自身の志向性、オリエンテーション、進むべき道、を少しずつ考えて行ってほしいものである。そして、その方向へ向けて自分自身を少しずつ形成していく努力をしてほしいものである。少しずつというのは、これは本来ジグザクの道であって、こういう方向に進んでいきたい、と思ったとしても、なかなかストレートにそういくとは限らないからである。
- (2)①例えば、もうすぐ有名中学校、有名高校の受験があるとする。そして、来年は何とか〇〇中学、〇〇高校の一年生になりたい、と願うとしよう。しかし、これは相手のある話であるから、自分の願いだけでは、どうにもならない。もちろん、何らかの志望を持ったら、やるだけのことはやらなくてはならない。
- ②しかし、ここで考えておかなければならないのは、ただ単に〇〇中学、〇〇高校に入ればいい、〇〇大学に入ればいい、という狭い理想的自己のあり方ではどうにもならない、ということである。どこの中学、高校へいこうが、どこの大学へいこうが、あるいは大学なんかいこうがいくまいが、自分はこういうことを原理・原則にして生きていくぞ、というものをこそ、何とか少しずつ小学生、中学生の時期に築かせたい、あるいは育てていきたい、ということである。もちろん生身の人間だから、受験に失敗すればすべてが嫌になるかもしれない。その上にまだ就職をどうするかということもある。
- ③我々は否応なしに人生のいろいろな岐路に直面し、そこで不本意な選択を迫られることもあるであろう。
- (3)①しかし、不本意だろうと本意であろうと、誰もが自分の思ったとおりに願ったとおりにいくというものではない。
- ②だからどういうふうになろうと、自分はこういう原理・原則だけは大事にして生きていこう、自分が本当にやりたいこのことだけは妥協しないで大事にしていこう、こういった姿勢を少しずつでも築いていくようになってほしいものである。
- ③うまくいかないときは、やはり落ち込むことがあるだろうけれども、落ち込んだ自分を自分自身で支えながら、これだけは大事にしていきたい、という方向に向かって、何とか自分自身を前進させていく力をつけて行ってやりたいものである。

5. 自分の使命を受けとめる

- (1)①理想的自己と言っても、単に、将来は金持ちになりたい、偉くなりたい、といった話ではない。あるいは、将来スチュワーデスになりたい、ファッションモデルになりたい、タレントになりたい、といった話でもない。
- ②そういうあこがれとは無関係に、具体的な社会的役割は、その時その場で一人ひとりに与えられることになるであろう。
- ③天命とでも言うべきものがあるから、先のことは誰にも分からない。与えられた使命には逆らっても仕方がない、私はこの世界で頑張るしかない、と自分に言い聞かせていかなくてはならない場合もあるであろう。いつの間にかその仕事の世界に入ってしまったいて、気がついてみたらそれが自分の人生になっていたということがあるわけである。
- (2)①世の中でどういう役割をどういう形で果たしていくか、という具体的なことになってくると、子ども自身そう先が見えるわけでない。大事なものは、基本的な姿勢なり決意なり方向感覚なりである。
- ②例えば、他人のために涙を流し、汗を流せる人間になりたい、といった気持ちこそが大切なのであって、それをどのような仕事や役割を通じて具体的にやっていくか、ということは枝葉の問題でしかない。いずれにせよ、どういうことがあろうと、自分に与えられた使命は果たしていくとか、いくらいいチャンスがあっても、こういうことは自分はやらないとか、あるいはチャンスがあれば、こういう方向に向けて自分を伸ばしていきたいとか、そういう原理・原則にかかわる問題を、少しずつ考えさせていきたいものである。
- ③そして、その方向へ向かって執拗に自分を支え、押し出していく、という力をつけてやりたいものである。これが自己実現の力という発想の底にある考え方ではないであろうか。
- (3)①自己学習の力がつく、自己教育の力がつく、そしてそれを土台にして、自分なりに納得のできる人生を生涯にわたって自分の力で形作っていく。
- ②自分自身の人生に自分で責任を持てるような生き方・あり方を、自分自身で創造していく。
- ③こうした総合的な力の土台作りを、何とを小学校や中学校で、さらには高校や大学で、重要な教育課題として意識的自覚的に取り組んでいきたいものである。

<コメント>

「教育の成果を決定する要因」とは「本人の自覚」と「教師の力量」と教えてくださった、尊敬する梶田叡一先生の教育論。「自己学習能力」とは「自己教育力」、「理想的自己をイメージ」し、「自分の使命を受けとめる」という教育プロセスは、素晴らしいの一言。これに「自己評価」論を加えることで、コロナ禍後の教育論が完成すると考える。

2021年6月1日林明夫記